

ISSN 2186 – 3989

外国学会発表報告

ICTEAP-4

(International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics-4)

2023 年 8 月 17 日 (木) ～ 19 日 (土) ソウル (韓国)

国際コミュニケーション学部 島田 博行

北 陸 大 学 紀 要
第56号(2024年3月)抜刷

外国学会発表報告

ICTEAP-4

(International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics-4)

2023 年 8 月 17 日 (木) ~ 19 日 (土) ソウル (韓国)

国際コミュニケーション学部 島田 博行

発表題目: Incorrect Association of the Focus Particle *Dake*:
New Evidence from Japanese.

[学会発表に至った経緯]

International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics (ICTEAP) は 2 年に 1 度、東アジアの各国において持ち回りで開催される理論心理言語学の国際学会である。今回はその第 4 回目にあたり、韓国の Dongguk University で開催された。私自身、これまでに第 1 回、第 3 回 ICTEAP でも発表したこともあるだけでなく、文字通りアジアを含めた各国から著名な研究者も発表する国際学会であり、非常にレベルの高い研究発表が集まる場所として有名だった為、コロナ禍もある程度落ち着きを見せたこの機に応募した。特筆すべき点は、今回の研究発表は本学科で私のゼミの卒業生である、斉藤こゆきさん、中村航平くん、長澤都色さん、太長根桃子さんら (順不同) の卒業研究が基となっている。私のゼミでは、主に学生 (グループ) の卒業研究には私自身もそこに加わり、本当に研究学界において意義のあることを調査し取り組んでいる。今回、この学生たちが観察したデータは大変有意義なものであり、世界に発表すべき内容であった。そこで私が彼らの研究成果を引き継ぎ発表してきたという経緯である。無論、学生たちは今後どこかで私が代表する形で発表することに関しては了承済みであり、また、卒業後も学会にて採択されたことを報告すると非常に喜んでくれた。学会発表時ならびに下記にて言及している論文 (査読段階) においても謝辞の欄にて言及しているが、上記の学生には、一緒に研究に取り組んでくれたこと、また発表の機会を与えてくれたことを含めて、改めてこの場で感謝の意を表したい。

[学会発表の内容・見聞]

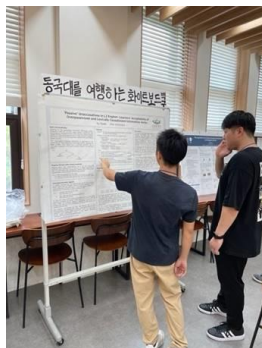
上述の通り、本学会には世界的にも著名な研究者が名を連ねることであるが、今回は University of Maryland の Jeff Lidz 先生、National Tsing University の Yi-ching Su 先生、東北大学の小泉政利先生らがいらっしやっていた。私は今回の研究発表では、日本語を母語とする子供の「だけ」に関する解釈に関して発表を行ってきたのだが、上記の Yi-ching Su 先生は最近中国語における焦点語句の子供の解釈に関して論文を書きになったこと、とりわけその中で実験デザインが非常に大きな影響を与えている可能性を示唆しているとのコメントをいただいた。また、今回招待講演者としていらしていた小泉先生は、私が発表した研究に非常にご関心をお持ちいただき、この度小泉先生が編集される国際学術雑誌に応募して欲しいとのご依頼も頂戴し、すでに最初の草稿を投稿した (上述の通り、現在は査読段階)。このような機会は、学会が対面で行われ、かつ国際学会だからこそ得られるものであり、これらの先生方にもこの場を借りて感謝申し上げたい。[写真 1: 発表時の様子]

また、今回の学会では、本学の学生である藤木美妃さんを通じて知り合うことができた Ohio University の大学院生、田崎佑氏とも対面することができた。田崎氏は藤木さんが留学時に現地で出会った学生で、言語学を学びながら私の論文を読む機会があったらしく、藤木さんの紹介を通じてメールで研究に関して意見等を交換していた。それ以来、私自身も田崎氏の研究には非常に興味を抱いており、この度学会で対面することでお互いの研究に関して意見やアイデアを交換するだけでなく、現在は我々の共同研究として新たなプロジェクトをスタートさせる機会にもなった。[写真 2. 田崎氏（左側）の発表と私の教え子でもある明治学院大学大学院生の杉浦航氏] [写真 3. 田崎氏と藤木さん]

[1: 発表時の様子]



[2: 田崎氏のポスター発表]



[3. 田崎氏と藤木さん]



[最後に]

コロナ禍も幾分か落ち着きを見せ、学会活動が世界的にも動きを見せ始めている。私自身も対面での国際学会は数年ぶりだったが、このように対面だからこそ、また世界中から集まるからこそ得られる知見があると改めて認識させられた学会であった。とりわけ私が取り組むような自然科学の分野ではそのような国際的なレベルでの知見の交換というのは必須と言えるだろう。この先も今の状況に甘んじることなく、新たな研究に取り組んでいきたい。末筆ではあるがこの機会を与えていただいた北陸大学関係者各位はもちろん、日頃より私の研究をサポートしてくださる佐野哲也先生（明治学院大学教授）と山腰京子先生（お茶の水女子大学教授）、この旅をサポートしてくれた藤木さん、田崎氏、杉浦氏にも心から御礼申し上げたい。